# 材料史

## 「紙」（7）

中村正實

### 日本での壁紙の普及

明治政府が樹立され急速な脱亜入欧が進む時代になって、政府の公共建築あるいは外国大使館、公使館や在留外国人の住宅などに壁紙が用いられるようになるが、当初はすべて輸入壁紙に頼っていた。銀座にあった睦屋は、早い時期にスイスのサルプラ社から壁紙を輸入し始め、官庁の貴賓室や大臣室、あるいは帝室博物館や三菱銀行ビルなどに施工している。

日本での壁紙普及に貢献した人物に２代目川島甚兵衛がいる。川島織物は天保 14 年（1843）に初代川島甚兵衛が創業し、和服用の織物を織っていたが、２代目甚兵衛は、農商務省大輔の品川弥次郎がドイツ駐在公使として赴任する際に同行しヨーロッパ８カ国を回って染色に対する知識を深めた。特にフランスのゴブラン織りに惹かれ、帰国後つづれ織をゴブラン織りに匹敵するものにしたいと研鑽を重ねた。帰国すると間もなく、明治宮殿造営に係る室内装飾織物の調達を命じられ、高島屋の協力で無事納入することが出来た。これをきっかけとして明治 22 年に新しく工場を建設し、デザイナーとして３名の画家を雇って、室内装飾用のつづれ織、紋織り、刺繍などの本格的生産に乗り出した。

川島の製品は宮殿や皇室用の車両、外国航路の大型客船をはじめ、財閥の三井、岩崎、浅野家などの邸宅に納められた。つまり、川島織物は、紙ではないが日本における西洋建築の室内装飾で、壁紙やタピストリーなどの先達となったのである。

ところで、国産の壁紙をいち早く手がけたのは三菱製紙だった。三菱製紙は、明治 30 年に岩崎家がトーマス・ウォルシュから神戸製紙の経営権を譲り受けてつくったもので、明治 31 年に工場を神戸から東京高砂に移し、合資会社三菱製紙と改称して、のち大正６年に三菱製紙株式会社となっている。昭和初年から壁紙の製造を試みていたが、なかなか目標とする品質が得られず、ようやく昭和 10 年に多色刷り輪転印刷機を設置して欧米並みの水準を目指す壁紙の製造を始めた。

第２次世界大戦の勃発で壁紙業界は壊滅的打撃を受けるが、終戦によって再び息を吹き返すときが来た。最初は駐留軍に接収された建物の内装工事で、殆どペンキで塗られたが、仕様書では従来壁紙が貼られていた場所には壁紙を使用するようになっていた。慶応元年創業の中村表装株式会社は、昭和 20 年 10 月に港区神谷町の日本郵船クラブビルが接収されると、壁紙の施工を行っている。その他にもビルなどを宿舎にした場合は、合板で簡単に間仕切った壁に壁紙を貼ることも多かったようだ。中村表装株式会社はそのご建設された駐留軍厚木基地の航空隊宿舎にも壁紙の施工を行っている。表具店として明治 12 年に創業した優雅堂も昭和 21 年に接収された満鉄ビルや山王ホテルを宿舎に改装した際に壁紙の施工を行っている。大正 12 年に創業した日本室内設備工業は、東京の練馬区と板橋区に渡って建設されたデペンデントハウス（駐留軍宿舎）グラント・ハイツの壁紙を施工している。デペンデントハウスの仕様書で壁は漆喰塗りになっていたから、おそらく天井に壁紙を貼ったのだろう。

日本経済が大きく成長した昭和 20 年代後半から、壁紙の普及に貢献した一人に、元禄３年（1690）に和紙問屋として創業した松屋商店から独立した京橋松屋の伴吉次がいる。剣持勇と親交のあった伴は壁紙の将来に注目していた。たまたま、昭和 27 年に接収が解除された銀座の百貨店松屋の改装工事を竹中工務店が引き受け、壁紙の施工を出入りの瀧田表具店に依頼した。この相談を京橋松屋が受けて荒い麻布を紙で裏打ちした壁紙を収めたが、大規模なこの工事が比較的短期間で終わり、大きな利益を得たことから、荒い麻布の壁装材料「ヘッシャンクロス」と洋服の芯に用いられた比較的目の詰んだ「ヘンプクロス」の販売に乗り出した。昭和 35 年に建設されたホテルニュージャパンでは、大規模な内装工事を京橋松屋が引き受けていた。当時の施工業者は規模が小さく与信の点で問題があったため、材料問屋の松屋が業界の反発を覚悟しての受注だった。

嘉永年間に名古屋で初代が表具師として創業し、名古屋城出入りの山月堂は昭和 28 年株式会社山月堂商店を設立し、昭和 35 年から壁紙の販売を始め、現在は壁装材料を含む内装材料の大手となって「株式会社サン

ゲツ」と称号を改めたが、山月堂商店に壁装材料の販売を勧めたのは京橋松屋の伴吉次だった。

やがて昭和40年代になって住宅の乾式工法が普及すると、壁紙の需要は一気に増えて今日に至っている。

ところで、戦後、住宅に壁紙が普及するきっかけをつくったのは、前段で軽く触れた駐留軍の「ディペンデントハウス」である。これは駐留軍将校のための家族用住宅として日本全国で13,561戸が建設されました。東京ではグラントハイツ(現在の光が丘団地)に1,262戸、ワシントンハイツ（代々木）に827戸、リンカーンセンター（国会議事堂前）に50戸、ジェファーソンハイツ（現在の参議院議員公舎の場所）に70戸、横田基地に450戸、立川に410戸、ハイドパーク（狭山市）に339戸建てられている。

この建設にあたってGHQ（連合軍最高司令部）は「日本の資材と我が国（アメリカ）における設計及び施工技術を以て、米国人の生活様式を満たすような建物であること。」という基本方針を固め、寸法体系は当時日本の工務店が使っていた尺貫法（木材）と、イギリスのメートル法（金属）インチ・フィート（パイプ類）の3本立てで準備され、」全体にはアメリカ風の外観にまとめている。

工法は軸組工法、屋根は瓦屋根、窓は引き違いとし日本の住宅に無かった網戸が採用された。調達した材料の中には合板50万枚のほか、ツノマタが60万ポンドも有るから、漆喰も用いられていたことが分かるが、壁紙も採用されていた。13,000戸を超す住宅を昭和20年12月から昭和22年3月までの短工期で仕上げるために、日本の工務店が慣れ親しんだ工法と材料、および寸法の単位を用い、アメリカ人の生活に合わせるという思い切った方法を用いたのだ。「家族住宅の敷地並びに配置に関する基準」には、建築様式・上下水道・電気工事・暖房配管・車庫とうが詳細に示されている。

余談だがディペンでントハウスが日本の産業界や日本人の暮らしに与えた影響は少なくない。アメリカ人の生活必需品だった家具や家電用品の生産供給が日本の業界にまかされたのだ。

家具は、長椅子、肘掛椅子、電話用のテーブル、ライティングデスクと椅子、本棚、食器棚、食卓と食堂椅子、ベッド、ナイトテーブル、衣装ダンス、ドレッシングテーブル、調理台など29種類の家具90数万点が調達され、その材質や塗装仕上げの方法まで細かく決められていた。家電商品では、冷蔵庫、扇風機、電気温水器、電気ストーブ、電子レンジ、アイロン、電気掃除機、洗濯機、トースター、ホットプレート、電気炊飯器、コーヒーメーカー等が発注されている。これが後日の住宅産業界、家具業界、家電業界の発展に大きく貢献していることは言うまでも有りません。今日の木造軸組在来工法はここに端を発しているのです。

余談が長くなりすぎた。最後に現在も用いられている紙に関わる言葉を改めてご紹介して終わりたいと思う。

**横紙破り**：丈夫な楮を使った和紙は流漉きで繊維に方向性があるため、縦には破りやすいが横に破るには無理があります。無理を承知で事を行うことを「横紙破り」という。

**お墨付き**：将軍や大名が臣下に与える領地を保障確認する文書に、花押がついてあることから権威ある保障を意味するようになった。

**折紙付き**：平安末期から公式の文書や贈答品の目録に半分に折った「折り紙」が用いられる習慣となり、贈答品には確かな品物を選び、品物の由来や来歴などを示したので、品質が保証されているという意味に使われるようになった。以上

ご厚意でPSATS REORTO Vol.023からこの号まで材料史の連載をさせて頂いたため、30年以上にわたって集めた資料を、転居等で不本意ながら失ってしまったが、主要な部分80%程度についてこの紙上でバックアップをとることができた。永年にわたりお読み頂いた会員の皆様と編集長、毎号お手数をおかけした東工大の小野口弘美さんに深く感謝いたします。